

小美玉市の歴史を知ろう⑦



霞ヶ浦上空から玉里地区を臨む（写真提供：国土交通省土浦出張所）



玉里御留川水域図 (境界地点は『水府志料』による)

緯文時代より、霞ヶ浦は、豊かな漁場として、沿岸に住む人々の生活を支えてきました。

江戸時代の漁業

48の津が漁場を管理して、魚を捕る道具や時期を自主規制するなどの自治が保たれていました。そもそも「津」とは、湖の一定水域を、共同して管理する自治組織のことと言います。

(1625)、水戸藩領となつた霞ヶ浦高浜入りの大部 分が、財源確保のため、水戸藩の玉里御留川となつてしまひます。

までの260余年にわたる御留川制度の中で豊漁・不漁の時期があり、3年ごとの運上金は最高額780両、最少額124両と大きな差があります。

現在、小美玉市玉里古文書
調査研究会（会長池上和子）
は、水戸藩支配下にあつた玉
里御留川の漁業と漁民を理解
するため、「鈴木家文書」お
録が残っています。

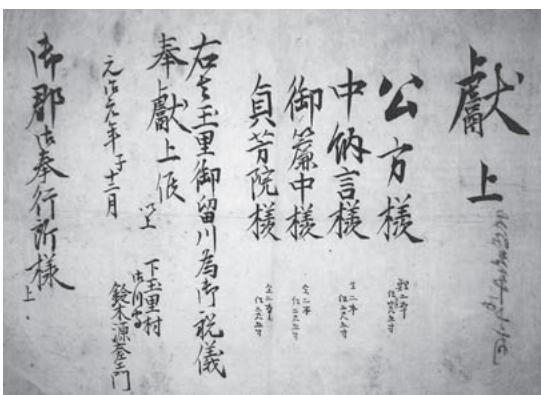
いたのです。この四十八津には、城之内、大井戸、高崎(いづれも市内玉里地区)が「津」に名を連ねていました。

しかし、江戸幕府は、霞ヶ浦の南東側の広大な水域、みのわだうら箕和田浦を幕府専用の漁場に設定しました。寛永2年

書によると、玉里御留川の漁業権は入札の結果、加藤須村（香取市）の与兵衛が3年間の請負金259両2分で落札しました。与兵衛はこの金額を9回に分けて、下玉里村の庄屋へ納め、庄屋から水戸藩へ上納されました。明治

藩主に献上されています。幕末になりますが、元治元年（1864）12月、「鯉献上目録」（鈴木家文書）には、公方様（14代将軍徳川家茂）、中納言様（水戸藩10代藩主徳川慶篤）などに2尺5寸（約75cm）の大鯉が献上された記

内では、役人のもとで行う直営の「直網」や高く入札したもののに漁業権を認める「入札運上」で漁業が行われ、四十八津側は自由に活動することができなくなりました。この範囲とされています。



「鯉獻上目錄」(鈴木家文書)

して刊行される予定です。
【参考文献】『玉里村の歴史～豊かな霞ヶ浦と大地に生きる～』
（次回の掲載は9月号です）

